

イギリス文学の歴史

An Outline History of English Literature

芹沢 栄 著

開拓社

イギリス文学の歴史

An Outline History of English Literature

江苏工业学院图书馆

藏书章 荣 著

開拓社

著者略歴

芹沢 栄（せりざわ さかえ）

東京文理科大学（英語学英文学科）卒。

東京教育大学名誉教授。

現東京成徳短期大学教授。

（主な著書）『イギリスの表情』『英語の輪郭』（開拓社）『英文学のふるさと』（毎日選書）など。

イギリス文学の歴史

1990 年 3 月 20 日 第 1 版第 1 刷発行

著作者 芹 沢 栄

発行者 株式会社 開 拓 社

代 表 者 長沼芳子

印刷所 共同印刷株式会社

発行所 株式会社 開 拓 社

郵便番号 101

東京都千代田区神田神保町 2 丁目 5 番地

電 話 東 京 (03) 265-7641 (代表)

振 替 東 京 6-39587 番

ISBN4-7589-0546-0 C3382

© 1990 Sakae Serizawa

はしがき

本書は、私が、イギリス文学史の講義を担当し、20数年を経過する間に、醸成された思いの成果である。

永い年月、終始、イギリス人の書いたテキストを使用してきた。それは、それとして、優れた教科書であった。ただし、それは、当然のことながら、とくに、日本の学生を対象にした著作ではなかった。したがって、日本の読者のニーズに対する認識において、不十分な点を感じさせられてきた。この点を補うことが、私の役割と思うに到った。これが、本書の執筆の大きな動機となった。

このようにして、本書は、わが国の英文科の学生、およびイギリス文学に関心をもっている一般読者を対象とし、これらの読者が、初めて読む「イギリス文学の歴史」とすることに照準を定めた。

イギリス文学の歴史は千年余に及び、その資料は膨大である。時の経過が、ある作品を消去させ、またあるものを選別して後世に伝えている。それにしても、この小著の中で、その長い歴史のアウトラインを伝えることすら容易なことではない。当然、厳しい選択を求められることになる。

その取捨選択に当たっては、著書の性質上、主観的独断に走ることは避けなければならない。幸い、内外の学者・研究者たちによって、多くの優れた研究成果が提供されている。したがって、筆者の役割は、これら先覚者の成果に、謙虚に耳を傾け、これを頼りにして、筆者の想定する読者にふさわしい形を整えて提供することにあると考えている。

本書が、読者にイギリス文学への誘いの一助となれば幸いである。

著 者

執筆の主旨

1. 文学史であるからには、核となる作家・作品の論述、文学思潮の流れを辿ることは基本的条件であるが、それに大きな影響を与える背景的社会事情に注目する必要がある。本書では、時代区分を大胆に行ない、それらの文学思潮の背景を必ず別項目を立てて論述した。
2. ページ数の限られた小著とは言え、重要な作家・作品については、多くのスペースを与えることを躊躇しないことにした(例えば、チョーサー、シェイクスピア、ミルトン、ディケンズなど)。文学史に、新しい事実を加えた作家・作品についても同様である。
3. 本文の流れをよくするため、派生的関連事項は、脚注にゆずり、文学用語、エピソードなどは、[余録]の欄を設けて扱うことにした。
4. 引用文には訳文を添えた。ただし、名訳を求めず、英文の内容理解の助けとなるための「大意」とした。
5. 本書を読み易くするため、各章の節を細かく区分し、なるべく小見出しをつけ、内容把握の便を図った。
6. 作品の邦訳名は、すでに一般的になっているものは、それを使用した(例:『失楽園』、『天路歷程』、『釣魚大全』)。
7. 作家名は、通例、「カタカナ」で出し、英語を付記した。「カタカナ」では、正確に表わしにくいと思われる場合には、「発音記号」を添えた。作品名については、邦訳名を出し、原名を添えてある。
8. イギリス以外の国の固有名詞については、すでにわが国で親しまれている呼び名を使用している(例:ゲーテ、ペトラルカ、ドンキホーテ)。
9. 読みにくいと思われる漢字には、「フリガナ」をつけた。また、英語の発音については、次のものを参照した。

Daniel Jones: *English Pronouncing Dictionary* (Dent)

『固有名詞辞典』(三省堂)

なお、作品の邦訳については、『年表:イギリス文学史』(荒竹出版)が参考になる。

目 次

第1章 古期英語・中期英語の時代（700-1500年）——ベイオウルフ、チョーサーの時代

1. 1.	イギリス文学	1
1. 2.	英 語	1
1. 3.	文学の芽生え	2
1. 4.	『ベイオウルフ』	3
1. 5.	古期英語時代の詩の特徴	3
1. 6.	古期英語時代の散文	4
1. 7.	ノルマン人の征服	5
1. 8.	チョーサー	6
	1. 生涯... 6 2. 作品... 6	
1. 9.	中期英語時代の散文	12
	1. マロリー... 12 2. キャクストン... 13	

第2章 ルネッサンス時代（1）（16世紀）——中世から近代へ

2. 1.	近 代	14
	1. ルネッサンス... 14 2. 宗教改革... 15 3. イギリスのルネッサンス... 15 4. イギリスの国力上昇と英語の発達... 15	
2. 2.	詩	16
	1. 16世紀前半... 16 2. エリザベス一世女王の時代... 16 3. ワИАットとサレー... 17 4. スペンサー... 18 5. シドニー... 21 6. シェイクスピア... 22	
2. 3.	散 文	25
	1. 散文物語... 25 2. 随筆... 26 3. 批評... 27 4. 旅行記... 28 5. 歴史書... 28 6. その他の散文... 28 7. 翻訳... 30	

第3章 ルネッサンス時代（2）（16世紀）——シェイクスピアの時代

3. 1.	イギリスの劇の起源と発展	33
3. 2.	シェイクスピア以前の劇作家	34
	1. リリー... 34 2. キッド... 34 3. マーロー... 35	
3. 3.	エリザベス女王時代の演劇事情	38

1. 劇場... 38	2. セリフ... 40	3. 俳優... 41	
3. 4. シェイクスピア			42
1. 生涯... 42	2. 第1期 (1590-1595) の作品... 44	3. 第2期 (1595-1600) の作品... 46	4. 第3期 (1600-1608) の作品... 52
5. 第4期 (1608-1611) の作品... 60	6. シェイクスピア批評... 62		
3. 5. シェイクスピアと同時代の劇作家たち			63
1. ベン・ジョンソン... 63	2. ボーモントとフレッチャー... 65		
3. ミドルトン... 65	4. ウェブスター... 65	5. フォード... 65	6. 劇場閉鎖... 66
3. 6. ジェイムズ一世時代の詩			66
1. 三つの流派... 66	2. ジョン・ダン... 67		
第4章 清教主義の時代 (17世紀<前半>)——ミルトンの時代			
4. 1. 社会事情			70
4. 2. 文学事情			71
1. ミルトン... 72	2. バニアン... 78	3. ブラウン... 79	
4. ウォールトン... 79			
第5章 王政復古の時代 (17世紀<後半>)——ドライデンの時代			
5. 1. 社会事情			81
1. 王政復古... 81	2. 驚異の年... 81	3. チャールズ二世の治世... 81	4. 科学の発展... 82
5. 2. 文学事情			82
1. 都会の文学... 82	2. 古典主義... 83		
5. 3. ドライデン			83
5. 4. 劇			85
1. 劇場再開... 85	2. ダヴナント... 86	3. 風習喜劇... 86	
4. ウィッチャリ... 86	5. コングリーヴ... 87		
5. 5. 日記文学			87
1. イーヴリン... 87	2. ピープス... 88		
第6章 18世紀——ポープ、ジョンソンの時代			
6. 1. 社会事情			89
6. 2. 文学事情			89
6. 3. 詩			90

1. ポープ... 91	2. ポープの後継者たち... 93	3. ロマン主義 の先駆者たち... 94	
6. 4.	ジャーナリズムとエッセイ文学	101	
1.	スティールとアディソン... 101		
6. 5.	小 説	103	
1.	デフォー... 104	2. スウィフト... 105	3. リチャードスン ... 106
4.	フィールドینگ... 107	5. スモレット... 109	
6.	スターン... 110	7. ゴールドスミス... 112	8. ゴシック・ ロマンス... 113
6. 6.	サミュエル・ジョンスンとそのグループ	113	
1.	サミュエル・ジョンスン... 114	2. ボズウェル... 117	
6. 7.	劇	118	
1.	ゲイ... 119	2. ゴールドスミス... 119	3. シェリダン... 119
6. 8.	書 簡	120	
1.	ウォルポール... 120	2. チェスターフィールド伯... 120	
3.	ホワイット... 120		
第7章 ロマン主義復興の時代 (1798-1832)—— ワーズワース の時代			
7. 1.	社会事情	122	
1.	産業革命... 122	2. フランス革命... 123	3. イギリスの繁 栄... 123
7. 2.	文学事情	123	
1.	ロマン主義文学の復興... 124	2. ワーズワース... 124	3. コールリッジ... 129
4.	スコット... 131	5. バイロン... 132	
6.	シェリー... 134	7. キーツ... 136	
7. 3.	小 説	139	
1.	スコット... 139	2. オースティン... 140	
7. 4.	随筆と評論	142	
1.	ラム... 142	2. ハズリット... 144	3. ド・クウィンシー... 145
第8章 ヴィクトリア朝時代 (1837-1901)—— テニスン、ディ ケンズの時代			
8. 1.	社会事情	146	
8. 2.	文学事情	147	

8. 3. 詩	148
1. テニスン... 148	2. ブラウニング... 150
3. アーノルド... 153	4. フィッツジェラルド... 155
5. 「ラファエル前派」の詩人たち... 155	6. D. G. ロセッティ... 156
7. クリステイーナ・ロセッティ... 157	8. モリス... 157
9. スウィンバーン... 158	10. メレディスとハーディ... 158
11. ホプキンズ... 159	
8. 4. 評論・歴史など	160
1. カーライル... 160	2. マコーレー... 162
3. ラスキン... 162	4. アーノルド... 163
5. ペイター... 164	
8. 5. 小 説	165
1. ディケンズ... 166	2. サッカレー... 169
3. ジョージ・エリオット... 170	4. ブロンテ姉妹... 172
5. その他の小説家(I)... 174	6. メレディス... 176
7. ハーディ... 178	8. その他の小説家(II)... 181
9. ヘンリー・ジェームズ... 185	10. コンラッド... 188
8. 6. 劇	190
1. ワイルド... 190	2. イブセンの影響... 191
3. アイルランドの演劇運動... 191	
第9章 20世紀——T. S. エリオット, ジョイスの時代	
9. 1. 社会事情	192
9. 2. 文学事情	193
9. 3. 詩	195
1. イェイツ... 197	2. T. S. エリオット... 199
3. W. H. オーデン... 201	4. ディラン・トマス... 202
9. 4. 小 説	203
1. H. G. ウェルズ... 204	2. ベネット... 205
3. ゴールズワージー... 206	4. モーム... 206
5. フォースター... 207	6. ウルフ... 209
7. ジョイス... 212	8. D. H. ロレンス... 215
9. オールダス・ハックスレー... 217	10. マンスフィールド... 218
11. オーウェル... 219	12. グリーン... 219
13. ウォー... 220	14. その他の小説家... 221
9. 5. 劇	222
1. ショー... 224	2. ゴールズワージー... 226
3. バリー... 226	4. カウアド... 226
5. アイルランドの劇作家... 227	6. T. S. エリオット... 228
7. オズボーンとその他の劇作家...	

229	8. サミュエル・ベケット... 229
9. 6.	批 評230
1.	T. E. ヒューム... 230
2.	T. S. エリオット... 230
3.	エリオット以後... 231
4.	I. A. リチャーズ... 231
5.	エンプソン... 231
6.	F. R. リーヴィス... 232
7.	J. M. マリー... 232
	参考書目抄233
	参考地図234
	イギリス文学史年表235
	索引243
【余録】	1. 叙事詩... 3
	2. 韻... 4
	3. 頭韻... 4
	4. 宮廷風恋愛... 7
	5. トロイ戦争... 8
	6. キャンタベリー詣で... 9
	7. トマス・ア・ベケット... 9
	8. アーサー王伝説... 13
	9. ソネット... 17
	10. ブランク・ヴァース... 18
	11. 寓意物語... 21
	12. スペンサー連... 21
	13. ピカレスク小説... 26
	14. ユートピア文学... 30
	15. 聖書英訳の歴史... 31
	16. 復讐悲劇... 35
	17. ド・ウィットのスケッチ... 40
	18. 開演と上演時間... 40
	19. 「幕」と「場」... 40
	20. シェイクスピア劇の分類... 45
	21. シェイクスピアの史劇... 45
	22. シェイクスピアの比喩的表現... 46
	23. ユダヤ人と金貸し業... 48
	24. アーデンの森... 49
	25. 三一の法則... 61
	26. 仮面劇... 64
	27. 気質喜劇... 64
	28. 比喩... 67
	29. 清教徒... 71
	30. 大旅行... 72
	31. 牧歌的哀歌... 74
	32. バニアンと聖書... 79
	33. ヒロイック・カプレット... 85
	34. 風習喜劇... 86
	35. コーヒー店... 90
	36. 古典主義... 91
	37. 韻文で書かれた論文... 92
	38. 擬似英雄詩... 93
	39. 詩語... 95
	40. 書簡体小説... 107
	41. 意識の流れ... 111
	42. ジョンソンとチェスターフィールド伯... 116
	43. ジョンソンの英語辞書から... 116
	44. パトロン... 117
	45. 湖水地方と湖畔詩人... 125
	46. ドロシー・ワーズワス... 126
	47. ダヴ・コテジ... 126
	48. ブラウニングの難解な詩... 153
	49. 劇的独白... 153
	50. ジョージ・エリオットというペンネーム... 171
	51. トロロプの『自叙伝』... 175
	52. 自然主義... 181
	53. 唯美主義... 184
	54. 名文家スティーヴンソン... 185
	55. 視点... 187
	56. プルームズベリー・グループ... 211
	57. 内的独白... 211
	58. 「怒れる若者たち」... 223

第1章 古期英語・中期英語の時代 (700-1500)

——ベイオウルフ、チョーサーの時代

1.1. イギリス文学

文学は、言語を表現手段とする芸術である。イギリス文学の表現手段は英語。しかし、英語で書かれた文学は、イギリス文学だけではない。今日では、アメリカ文学・オーストラリア文学・カナダ文学・その他、英語で書かれた種々の文学が考えられる。

本書では、「イギリス文学」を、イギリス諸島 (British Isles)——ブリテンとアイルランド——で書かれた文学だけに限定することにする。

1.2. 英語

英語は、ヨーロッパ大陸からブリテン島に移住して来た民族の言語から誕生した。ドイツの北部からデンマークあたりに住んでいた民族——アングロ・サクソン民族——のゲルマン語系統に属する言語である。

この民族の移住は、2世紀から11世紀にわたっているが、5～6世紀がその頂点であった。¹

英語は誕生以来、大きな変化を経て今日に到っている。英語史では、変化して来た英語を次のように、時代区分をしている。

¹ この移住は、ゲルマン諸民族の大移動の一環をなすものである。この「民族移動」(Wandering of the Nations) は西ローマ帝国の滅亡 (476) をもたらした。



- (1) 古期英語 (Old English) —700年から1100年まで。叙事詩『ベ
イオウルフ』の英語。
- (2) 中期英語 (Middle English) —1100年から1500年まで。チョー
サーの英語。
- (3) 近代英語 (Modern English) —1500年から現代まで。シェイク
スピアの英語もここに属する。

1.3. 文学の芽生え

アングロ・サクソン民族のブリテン島への移住とともに、当然、素朴な詩歌、物語などイギリス文学の芽生えがあったものと考えられる。およそ紀元700年以後になると相当量の記録が残っている。²

本書では、この時代の作品中、ほぼ完全な姿で写本 (manuscript)³が残っている作品『ベイオウルフ』を取り上げることにする。

² これらの作品は、現代語訳で、Everyman's Library, 794 の *Anglo-Saxon Poetry*, Selected and edited by Professor R. K. Gordon に (主な作品 34 編) 収められている。

³ 10 世紀末に書き写されたものと推定されている唯一の写本が British Museum に保管されている。その創作は、これよりはるかに古いものと考えられている。

1.4. 『ベイオウルフ』 (*Beowulf* [bēiəwulf])⁴

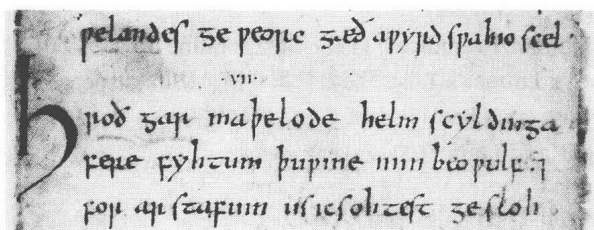
(1) **イギリス文学最古の叙事詩** 約3,200行からなる、作者不明の叙事詩(epic) [余録1 参照] である。素材は、まだ大陸にいたころのゲルマン民族の間に語り伝えられた伝説で、7世紀末から8世紀末までの間に書かれたものと推定される。

(2) **『ベイオウルフ』の物語** スウェーデンのベイオウルフという勇士の怪物退治の武勇談で、自己を犠牲にして、悪と戦う英雄の性格を鮮に描いている。

この詩は、当時の北国の自然の状景、生活状況などを伝える貴重な記録となっている。

【余録 1】 叙事詩 (epic)

長い物語詩の一種で、崇高荘重な韻文によって、歴史や伝説に現われる神々や英雄的人物の行為・行績を扱う長詩である。元来 epic は、原始的起源を有するもので、たえず口伝(口伝)による変更を受けながら伝承されて、次第に増大し、ついに叙事詩形式として凝固したものである。epic には2種類がある。(1) 原始的叙事詩：(例) ホーマーの『イリアッド』、『オディッセ』など、(2) 文学的叙事詩：(例) 『ベイオウルフ』、ミルトンの『失樂園』など。



『ベイオウルフ』写本

⁴ 『ベイオウルフ』の現代語訳は多く出ているが、次のものは手に入れやすい。

Gordon, R. K., *Anglo-Saxon Poetry* (Everyman's Library, 794), revised edition, 1954 (*Beowulf*, pp. 1-62), London.

Alexander, Michael, *Beowulf*, a verse translation (Penguin Books).

なお日本語訳には次のようなものがある。

厨川文夫訳：『ベオウルフ—附フィンズブルフの戦』 岩波書店, 1941, 1977 復刊

大場啓蔵訳：『新口語訳 ベオウルフ』 篠崎書林, 1978.

1.5. 古期英語時代の詩の特徴

- (1) **頭韻** 『ベイオウルフ』を初め、古期英語の詩には、脚韻はなく、各行に頭韻が用いられた。〔余録 2,3 参照〕
- (2) **代称 (kenning)** この時代の詩には、代称という表現法が用いられた。一つの名詞をいくつかの語で比喩的に表現する技法で、例えば、sea は whale-road, sun は world-candle という類である。

【余録 2】 韻 (rhyme [raim])

2 個以上の語、または詩の行の終りで、最後の強勢のある母音およびその後の音が同じで、母音の前の音は異なるとき、その両者は韻を踏んでいる、あるいは押韻する。行の終りの韻をとくに脚韻 (end rhyme) という。次の各組は押韻する。

{ kind [káind]	{ sēt [sēt]	{ guést [gést]	{ ríght [ráit]
{ mīnd [máind]	{ gēt [get]	{ tést [tèst]	{ síght [sáit]

【余録 3】 頭韻 (alliteration [əlitəreɪʃən])

同じ行のいくつかの語が同じ音、もしくは同じ文字で始まるのを頭韻という。これは詩だけでなく、ことわざ・標語・書名、その他日常の慣用句などにも用いられている。

Care killed the cat. 「(九生あるという) ねこでさえ心配のため死んだ (心配は身の毒)」

Pride and Prejudice 「自負と偏見」(Jane Austen の小説)

Love's Labour's Lost 「恋の骨折り損」(Shakespeare の喜劇)

as busy as a bee 「みつばちのように忙しい」

might and main 「力いっぱい」

1.6. 古期英語時代の散文

- (1) **デーン人の侵入 (Danish Invasion)** 8 世紀末からスカンジナビアのデーン人 (Danes) が、イングランド北東部地方に侵入し、その地方にすでに栄えていた学問・文芸に壊滅的打撃を与えた。
- (2) **アルフレッド大王 (Alfred the Great, 849-901)** アルフレッド大王は、南英ウェセックス (Wessex) に據り、デーン人の侵攻を防

ぎ、他方、学問の再興を図った。王の指導の下に英語による最初の歴史『アングロ・サクソン年代録』(*The Anglo-Saxon Chronicle*)が編集された。ここで用いられた簡明な英語は、英語散文の基礎を築くことになった。ウェセックス王国の首府ウィンチェスターは、英語散文の揺籃の地となり、アルフレッド王は「英語散文の父」と呼ばれている。

1.7. ノルマン人の征服 (Norman Conquest, 1066)

(1) 1066年、イギリス王エドワード (1004-66) が死ぬと、子供がなかったため、王位継承の問題が起こった。結局、フランスのノルマンディー公ウィリアム⁵が、1066年、イギリスに進攻し、王位についた。これが、イギリス史上最大の事件「ノルマン人の征服」である。

(2) **征服と英語の地位** 征服後、「学者・聖職者はラテン語、上流階級はフランス語、庶民は英語」を用いるという状況になった。

英語は、依然として、大多数の国民によって話されていたが、被征服者の言葉であり、無教養の庶民の話す方言となりさがり、国語としての地位を失ってしまった。

したがって、学問的著作はラテン語で、文学はフランス語で書かれるのが普通であった。英語が国語としての地位を取りもどすまでには、征服後、300年ほどの年月を必要とした。

(3) **英語の地位の回復** 長い年月の間に、英語は次第に国語としての力を回復してきた。その間に、多くのフランス語が英語の中に入ってきて、英語の語彙は非常に豊富となり、表現力も大いに増大した。それは文学語としての要件が整ったことを意味する。この時に当たり、英語を用いて作詩し、文学表現の言葉としての英語の優秀性を証明したのがチャウサーである。

⁵ ウィリアム一世となり、ノルマン王家の祖となる。現在のイギリス女王エリザベス二世はその子孫である。今でも、イギリス人のうちには、先祖がノルマンから出ていることを誇りにしているものがある。トマス・ハーディーの小説『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the D'Urbervilles*, 1891)の悲劇の発端はこの事に関係がある。

1.8. チョーサー (Geoffrey Chaucer [dʒɛfri tʃɔ:sə], 1340?-1400)

1.8.1. 生涯

(1) **宮廷生活** チョーサーは、ロンドンのぶどう酒商を営む豊かな家庭に生まれた。若いころから、小姓^{こしょう} (page)として、宮廷に仕えた。このため貴族階級の人々と近づきになり、宮廷の風習・作法を学び、高い教養を身につけることができた。当時の宮廷は、まだフランス語が話され、フランスの文学や音楽などが楽しまれていた世界であった。したがって、チョーサーはフランス文学に接する機会に恵まれた。



(2) **詩人としての修養** 彼は「百年戦争」の折、フランスの戦場へ赴き、また外交官として、フランス、イタリア、その他の国へ行く機会を持った。豊かな文学的天分に恵まれ、しかも大の読書家であった。各地の風物・人間に接し、細心の観察を続け、詩人としての成長をとげていった。

彼は生涯を通じ、外交官・税関の監督官・治安判事・国会議員などの仕事に従事し、余技・教養として詩作を行なったのである。1400年死亡。ウェストミンスター寺院の「詩人の墓所」(Poets' Corner)に葬られた。

1.8.2. 作品

チョーサーの作品は、通例、三つの時代に区分して考えられる。

(1) **第1期——フランス期 (1359-72)** フランス語の作品からの翻訳や模倣の類の作品が多く、この時代のフランス文学の影響は、生涯を通じて、持続した。ことにフランスの韻文^{ぶん}の寓意物語〔余録 11 (p. 21)〕

参照]『バラ物語』(*Roman de la Rose*)⁶を翻訳したことの意義は重要であった。この物語によって、チョーサーは、「宮廷風恋愛」[余録4参照]といわれて来た中世ヨーロッパ文学における愛の伝統について知ることができた。この恋愛観は、彼の作品の随所に現われている。

(2) 第2期——イタリア期 (1372-85) イタリアの詩人たちの影響を受けた時期で、この期の代表作は『トロイラスとクリセイデ』である。

(3) 第3期——イギリス期 (1385-1400) 晩年の約15年間で、円熟の域に達し、もはや模倣的態度を脱し、独自の世界を確立した時期。この時期の成果が、『キャンタベリー物語』である。

【余録4】 宮廷風恋愛 (courtly love)

中世、南フランス、プロヴァンス地方の叙情詩に初めて現われた恋愛形式で、ヨーロッパ大陸で文学的題材として流行した。若い騎士が、自分より身分の高い女性(通例、既婚者)を理想の女性として、あこがれ、崇拝して仕えるという形をとる。普通、主君の奥方などの場合が多く、表面的には、精神的恋愛で、謙虚と礼節が要求され、その関係は、秘密のうちに保たなければならない。したがって、姦通(うご)という形をとることになる。

中世においては、城主の妃は、政略のため、恋愛のない結婚をさせられた。したがって、真の恋愛は、彼女に仕える騎士たちとの間に生まれた。この恋愛がロマンスの題材となった。

マロリーの『アーサー王伝説』の王妃とランスロット、チョーサーの『騎士の話』(『キャンタベリー物語』)、『トロイラスとクリセイデ』、スペンサーの『妖精の女王』などに宮廷風恋愛の例が見られる。

1.8.2.1. 『トロイラスとクリセイデ』(*Troilus and Criseyde*,⁷ 1385?)

(1) 8,200行を越える長い物語詩。「トロイ戦争」[余録5参照]にまつわる物語で、素材はイタリアのボッカチオの『恋のとりこ』である。

⁶ *Roman de la Rose* は、寓意物語の形式で書かれた、中世最大の恋愛論ともいうべき詩で、チョーサーの恋愛観にも大きな影響を与えた。チョーサーの訳の表題は、*Romaunt [roumɔ:nt] of the Rose*.

⁷ *Troilus* [trɔɪləs], *Criseyde* [krisɛɪdə]. シェイクスピアも、同じ物語を用いて、悲劇 *Troilus and Cressida* [krɛsɪdə] (1601-2) を作った。